

日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
観客と共創する芸術—光・音・身体の共振の社会的・芸術学的・工学的研究 シンポジウム

色彩

2018年9月22日[土]

12:10 - 16:45

埼玉県立近代美術館 講堂

申し込み不要・入場無料

プログラム

開場 11:50

開演 12:10

ごあいさつ 12:10-12:25

山崎 敬一

先導的人文学・社会科学研究推進事業 プロジェクト代表

加藤 有希子

シンポジウム・オーガナイザー

第 1 部 12:25-13:55

國本 学史

日本色彩の形成略史 イロ—彩色—色彩

吉澤 陽介

慣用色名の存在価値についての考察

～色空間における慣用色名認識の定量化の試みから～

井口 壽乃

ニューメディアと色光——20世紀メディアアートの実験から

第 2 部 14:10-15:40

児玉 幸子

黒の意味と眩惑について

加藤 有希子

生命と非生命のあいだで：児玉幸子の黒，プリジット・ライリーのピンク

長谷川 紫穂

ビデオの色彩：70年代，サイケデリック，日本の技術

第 3 部 16:00-16:45

ディスカッション

主催 | 埼玉大学人文社会科学研究科／先導的人文学・社会科学研究推進事業

共催 | 埼玉大学基盤教育研究センター

オーガナイザー | 加藤有希子 (埼玉大学基盤教育研究センター 准教授)

お問い合わせ | 048-858-3604 (シンポジウム事務局：電話受付時間 12:30-17:30 [火・金])

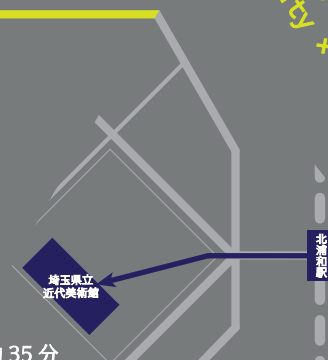
info0922@googlegroups.com

会場 | 埼玉県立近代美術館 2階講堂

埼玉県さいたま市浦和区常盤 9-30-1

アクセス | JR 京浜東北線 北浦和駅西口より徒歩 3分

JR 東京駅、新宿駅から北浦和駅までそれぞれ約 35分



色彩 × 日本的感性 × メディア

本シンポジウムは、色彩、日本的感性、メディアという異分野をかけあわせ、領域横断的に考察する場を提供する。今、何が争点で、何がホットなのか——参加者は人文系研究者、理系研究者、アーティストなど多分野にまたがり、自身が今争点と思うことをそれぞれに究明していこう。その興味の矛先の多様性が、現代社会の問題の複雑さを浮き彫りにする。その意味で、このシンポジウムが目指すところは、結論に帰結することではない。ここからスタートすることである。ここからわれわれ現代人、そしてわれわれ日本人の問題が始まる——そういう話し合いを目指していく。

シンポジウム・オーガナイザー 加藤 有希子

國本 学史

慶應義塾大学文学部/通信教育部 非常勤講師

慶應義塾大学大学院文学研究科美学美術史学専攻、後期博士(博士)課程単位取得退学。東京工芸大学、共立女子大学、お茶の水女子大学等での非常勤講師、日本学術振興会特別研究員、慶應義塾大学アート・センター ARCMA プロジェクトマネージャ等、を経て現職。日本の色彩材料の歴史、日本の色名の変遷、色彩論の日本での受容や展開等について研究。



吉澤 陽介

木更津工業高等専門学校 准教授 (情報工学科:メディアデザイン研究室)

長野県長野市生まれ。2010年博士(工学,千葉大学)。日産自動車(株)、千葉大学などをを経て現職。視覚伝達デザイン・情報工学・人間工学の境界分野における研究・制作活動を行なっている。特に、JIS慣用色名の価値を定量評価することに力を入れている。日本色彩学会、日本デザイン学会、長野県デザイン振興協会などに所属。

児玉 幸子

アーティスト/電気通信大学 准教授

筑波大学芸術学研究科修了、博士(芸術学)。漆黒の液体(磁性流体)による有機的でダイナミックな動きをテーマにした作品を発表。代表作「呼吸するカオス」、「突き出す、流れる」など。現象のデザイン、芸術創造のための道具を作ることから初めて、変化する形・色彩・空間と視覚・身体の関係性を探求。



加藤 有希子

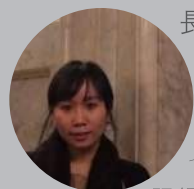
埼玉大学基盤教育研究センター 准教授

専門は近現代美術史、表象文化論、色彩論。米国デューク大学美術史表象文化学科で博士号取得。2012年より現職。主な単著に『新印象派のプラグマティズム』(三元社、2012年)、『カラーセラピーと高度消費社会の信仰』(サンガ、2015年)、共著に「ライリーとスーラ、日本的あるいは生命と非生命のあいだで」(DIC川村記念美術館『ゆらぎ ブリジット・ライリーの絵画』、2018年)などがある。

井口 壽乃

埼玉大学人文社会科学部 教授/副学長

専門はデザイン史、映像論。博士(芸術学)。20世紀芸術における技術およびメディアとの融合の観点から、メディアアートに関する研究を行っている。主な著書に『ハンガリー・アヴァンギャルド:MAとモホイ=ナジ』(彩流社、2000年)、『西洋美術の歴史8:20世紀』(中央公論新社、2017年)など。



長谷川 紫穂

先導的人文学・社会科学研究推進プロジェクト 研究員

専門は近現代芸術論、芸術とサイエンス/テクノロジーの関連について研究を進める。主な論文に「初期メディアアートにみるインタフェース・デザイン:芸術表現としてのインタラクション空間構造についての考察」(『デザイン史学』第12号、2014年)、「ビデオ情報としての「美術の現状」——VICの記録にみる作品とその前後」(『KUAC Cinematheque 1:ビデオはおもちゃだ!VIC#1』2017年)など。